

8月17日(水)保幼小中連携研修会を行いました



- 【午前の部】
1. 時間 9:00-11:30
 2. 会場 舞鶴市政記念館ホール
 3. 主催 舞鶴市、舞鶴市教育委員会
 4. 目的 0歳～15歳までの切れ目ない質の高い教育において、保育所・幼稚園、小学校、中学校でどのような連携が大切であるか、その方向性について共通理解を図る。
 5. 対象者 保育所・幼稚園、小・中学校の校(園)長または教頭及び教諭・保育士
 6. 内容
 - (1)開会あいさつ 舞鶴市教育委員会 教育長
 - (2)趣旨説明 舞鶴市教育委員会 指導理事
 - (3)講演 「学びと育ちをつなげる連携教育～遊び込みから学び込みへ 記録と発信の重要性～」
鳴門教育大学大学院 木下 光二 教授
 - (4)質疑応答
 - (5)閉会あいさつ 舞鶴市健康・子ども部 部長



- 【午後の部】
1. 時間 13:00-16:30
 2. 会場 舞鶴市政記念館ホール
 3. 主催 舞鶴市、舞鶴市教育委員会、舞鶴市小学校教育研究会生活科部
 4. 目的 保幼小連携の意義や目的について理解を深める。連携協力園・校での生活科の授業づくりを通して、お互いの理解を深めながらそれぞれの「ねらい」を持った連携活動について研修する。
 5. 対象者 今年度連携活動を担当している保育所・幼稚園 年長児担任教諭・保育士、小学校1年(2年)担任教諭、小学校教育研究会生活科部員 等
 6. 内容
 - (1)開会あいさつ 舞鶴市教育委員会 指導担当課長
 - (2)趣旨説明 舞鶴市教育委員会 指導主事
公開授業に向けて 公開園・校代表 中舞鶴小学校
 - (3)講義 「子どもの主体性が発揮される活動づくりのポイント」
鳴門教育大学大学院 木下 光二 教授
 - (4)グループワーク 説明:生活科部長
生活科「たのしい秋いっぱい」での交流活動づくり
 - (5)報告・交流 (6)指導・助言
 - (7)閉会あいさつ 舞鶴市小学校教育研究会生活科部顧問

参加園・校

<保育園>
永福、岡田、さくら、昭光、相愛、平、タンポポハウス、なかすじ、東山、八雲、やまもも、ルンビニ、うみべのもり、中、西乳児

<幼稚園> 朝来、倉梯、シオン、橘、中舞鶴、ひばり、舞鶴聖母、三鶴、森の子ら、舞鶴

<小学校> 朝来、余内、池内、大浦、岡田、倉梯、倉梯第二、志楽、新舞鶴、高野、中筋、中舞鶴、福井、三笠、明倫、由良川、吉原、与保呂

<中学校> 青葉、加佐、白糸、城南、城北、若浦、和田

参加園・校

<保育園>
永福、岡田、さくら、昭光、相愛、平、タンポポハウス、なかすじ、東山、八雲、やまもも、ルンビニ、うみべのもり、中

<幼稚園> 朝来、池内、倉梯、中舞鶴、ひばり、舞鶴聖母、三鶴、舞鶴

<小学校> 朝来、余内、池内、大浦、倉梯、倉梯第二、志楽、新舞鶴、高野、中筋、中舞鶴、福井、三笠、明倫、由良川、吉原、与保呂

講演「学びと育ちをつなげる連携教育～遊び込みから学び込みへ 記録と発信の重要性～」

幼児期から児童期へつなげたいものは「夢中になって遊び込む力」、それが「学び込める力」となる。カリキュラムで本来伝えることは、「遊びの中の学び」…記録と考察により、遊びと学びがつながる。～木下先生のコメントより～

たくさん写真を使って事例を示し具体的にお話いただいたことで、参加者からも「とても分かりやすかった。」「ポイントになる点が見えた。」「幼児がこんなに遊びの中から多くの学びを得ていることに驚いた。この学びを小中学校でもつなぐ必要がある。」といった感想が寄せられました。

～講演内容～

<舞鶴市の連携研修>

由良川小学校と八雲保育園の連携活動「チューリップの球根を植えよう」
一緒に球根を植えるという簡単な活動であったが、保育園側も小学校側もとても楽しそうに連携を行い、学び合っていた。先生が楽しめるものでないと、させられる連携は意味がない。

<乳幼児教育の現状と課題>

◎日本の課題: 関係性の希薄さ
…人と関われない、交われない
→子どもがまだ柔らかな乳幼児期から中学校ぐらいまでに、関わることの楽しさと大切さを学ぶのが連携活動。

◎乳幼児教育: 遊んでいるようにしか見え

ないが、遊びの中で学んでいることがたくさんある。→見えないとつながらない…遊びと学びをいかに捉えて可視化するかが大事。

<OECDの調査と新しい学力観>

◎OECDの学力調査…近年日本は数値化しにくい学力(自己肯定感、学習意欲等)が低迷。

◎OECDでは今後世界で子どもたちが身に付けなければならない力として3つのキーコンピテンシーを示している。

- 「相互作用的に道具を用いる」
- 「自立的に活動する」
- 「異質な集団で交わる」

↳正に連携はこれにあたる。いつもとは違う集団で交流することで学び合う。

- ・争いを処理し解決する
- ・協力する、チームで働く
- ・他人と良い関係をつくる

例)保育や連携活動でスコップが人数分ない
→譲り合って使うことを学ぶ

<フィンランドの教育>

◎フィンランドは国を豊かにするために教育にお

金をかけた。

～2枚の写真から分かる、フィンランドの教育～
①何気ない日常の風景写真。親子と女性が道を歩いている。ここから分かることは何か?

→親子が手をつないで歩いている。フィンランドの親子等を見ているとほとんどが手をつないで歩いている。子どもが大切にされていることが見える。日本では手をつなずに歩いている場面をよく見る。

自分が講師として保育所・幼稚園に行った時、朝の登園風景を見るようにしている。登園時に親子がどれくらい手をつないでいるかで、保育の質が分かる。どれだけ子どもが大切にされているか、乳幼児期が豊かであると、小学校・中学校期も安定して豊かに過ごせる。

②空港での写真。日本に比べると職員の数が少なく殺風景。

→日本のように丁寧なアナウンスはなく、各自が気をつけて案内板を見て乗る。つまり情報は自分でつかみ取るものという環境で育つ。分からないことがあってもすぐに聞かず自分で解決しなければならぬ。日本は親切すぎる。自分で考え

(1 ページから続く)

る必要のない環境になっている。

<学習指導要領の改訂>

◎論点整理が示され、今後育成すべき資質・能力として3つの柱が示されて、乳幼児期から中高までつらぬく形になっている。

資質・能力の要素 未来を切り拓く力 3つの柱

1. 「何を知っているか。何ができるか。」
(個別の知識・技能)
2. 「知っていること・できることをどう使うか。」
(思考力・判断力・表現力等)
3. 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。」(主体性・多様性・協働性・学びに向かう力・人間性等)

◎改訂の視点:「何ができるようになるか」

「何を学ぶか」「どのように学ぶか」

→能動的に学ぶアクティブ・ラーニングの視点による不断の授業改善、学習評価の充実、カリキュラム・マネジメントの充実が求められている。

◎子どもがチャイムが鳴っても、もっと調べたいと言って続けること…学校では授業形態もあり難しいが、幼児教育では、その時間が終わっても続けることはよくある。

◎文部科学省の田村視学官は、「幼児教育はアクティブ・ラーニングそのものであると言える。子どもが思いや願いに基づいて、主体的に学ぶ姿を大切にしてほしい。」と話している。
幼児教育はアクティブ・ラーニングそのものであり、それを小学校・中学校にも入れていこうという改訂である。

<連携教育を推進するために 幼児教育の理解>

幼児期から児童(生徒)期につなげるもの

→いかに遊び、夢中になっているか。

「遊び込んでいる」と「遊ばされている」ととは違う。学びについても同じ。

◎中学校から小学校、小学校から幼児期の教育が見えているか？

例) 幼小連携活動ではさみを使っている1年生の女の子を見て…

小学校教諭:「まだまだ使えていないな。」

幼稚園教諭:「こんなにもできるようになった。」※幼稚園時代の担任

→評価感が違う。小中でも、中学校に入ってきた子がテストで30点をとった場合、小学校の時に20点だった子なら10点も上がっている。ほめるべきところ。

お互いに訪れ「どのように育ってきたのか、どのように育っていくのか」保幼と小、小と中…両者で同じものを見ることが連携・接続の重要な部分。

「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へ

→連携のキーワード

例1 写真「わたげおうろいます」

(わたげをうえています)

5歳4カ月の子が書いて立てた看板の写真

◎この子はまだひらがなを習っていないが、伝えたくてがんばって書いたもの。幼児期に文字に出会っている。間違った文字や鏡文字もあるがそれでいい。**文字は誰かに何かを伝えたいから書くもの。その経験が大事**。遊びだけれど学びがある。

→(学び)自然との関わり、5歳児の「文字の」使用、伝える必然性、表現する喜び

◎学びに向かう力10項目のほとんどがあ

り、それを保育者としてしっかり捉えて発信している。

10項目:健康な心と体/自立心/協同性/道徳性・規範意識の芽生え/社会生活との関わり/思考力の芽生え/自然との関わり・生命尊重/数量・図形・文字等への関心・感覚/言葉による伝え合い/豊かな感性と表現

◎今のスタートカリキュラムは、適応指導になってしまっているものも多いが、カリキュラムで保育所・幼稚園から小学校に本来伝えることは「遊びの中の学び」である。

例2 お兄ちゃんの長さか！

「こいのぼりをつなぐひもは自分で切るんだよ」「どれくらい切るの?」「自分の身長より少し長くな。」「……。」しばらく考えた後、「そうか、お兄ちゃんの長さか!」と言って自分でひもを切った。「どれどれ、先生と比べてみようか」と切ったひもを私の背と比べてみると、私より少し長くなっていた。すると、「先生より高くない」という返事が返ってきた。

→長さの感覚を学んでいる。分かりやすく伝えることが大事。

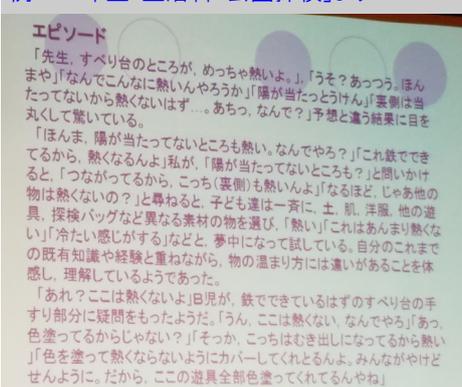
例3 恐竜博物館

恐竜が好きな男の子が、たくさん描いた恐竜の絵を使用して恐竜博物館ごっこを始めた時の子ども同士の会話より

「では、恐竜博物館をはじめます。」「これは何という恐竜でしょう?」「ティラノザウルスです。」「トリケラトプスもいます。」「空を飛ぶ恐竜は誰でしょう?」「わかりません?」「プテラボンです。翼竜ともいいます。」「どうして恐竜が空を飛ぶんですか?」「それは歩いて遠くへ行くのがめんどくさいからです。」「どうして遠くへ行くんですか?」「それは、エサを探すために決まってるじゃないですか。」「どうして椰子の木があるんですか?」「草食の恐竜が食べるんです。」「椰子の実が堅くないんですか?」「恐竜の歯はすごいんです。」「どうして富士山があるんですか?」「椰子の木を育てるためにあります…」(学び)言語能力 コミュニケーション能力

◎子ども自身が遊びをつくっている。小学生以上なら自分で学びをつくる。遊びの中では、子どもたちの会話も豊かになる。やりとりを通して言語能力やコミュニケーション能力等が育っている。

例4 1年生:生活科「公園探検」より



1年生:生活科「公園探検」より

◎担任が出来事を記録として切り取らないと消えてしまう。幼保での活動だけでなく、生活科も記録で見えやすくなる。活動あって学びなしなどと言われたが、実は豊かな学びがある。

<学び合う遊び・教育(授業)づくり>

・環境を通して学ぶ

・学び合うための環境づくり

・出会いの生まれる環境づくり

◎接続カリキュラムは5歳児と1年生とがつながりやすい。連携は、何歳と何年生とでもやった方がよい。

例1 学校探検オリエンティング

・「ここが〇〇室」と案内するものではなく、宝もの見つけにした。1年生がクイズを作って、その中から面白いものを選んでワークシートを作り、オリエンティングしてまわった。

校庭にある池では、「こいが何匹いるか?」というクイズ

◎こいは動くので数えられない。しかし、「手をたたくと集まってくるから、何か所かに分かれて手をたたいて集まったこいを数える。」など、各グループで様々な数え方が繰り広げられた。

◎知恵を出し合っている。発達の違う者同士が出会って、一緒に考えると新しい発想が生まれる。

◎正解を求めているのではない。こいの数はどうでもいい。楽しい時間と空間を共有している。◎年長児には小学校のイメージが入る。小学校は楽しいところ、お兄さんお姉さんを信頼していいんだ等。安心感があると自己発揮できる。

◎人事異動で初めての学校に行く時は大人でも怖い。しかし一度行ったことがあると、またそこに知っている人がいると安心する。

◎連携のおかげで、年長児は安心して小学校生活が始められる。小学校から中学校も一緒に◎普通は3か月で学ぶことが、連携活動を通して安心した状態で入学してくると1か月で学べる。

例2 ザリガニとり…手をつないで歩くだけで関係性ができる。大勢ですので糸が絡まって泣いたのが1年生で、大丈夫だよととってあげたのが5歳児ということもある。小学生が自分はこれが上手いと思っていたが、5歳児でそれが上手い子がいたりすると刺激を受ける。

◎時々、異なる集団で連携するとよい。それは縦だけでなく、保育園が他の園と、小学校同士など横の連携も、縦も横も連携は大事。

◎連携というと、学校の先生からは「忙しいからできない。」という答えが返ってくることもある。しかし、やってみて教育効果が分かれば取り組める。忙しくない学校などない。

◎小中学校の先生は、忙しくても国語は飛ばさない。それは教育課程に位置づけているから。連携活動も教育課程に位置づけるべき。

例3 カレンダー作り

◎1年生は算数で20までの数を習う。連携活動でカレンダー作りをした。30までの数になる。

◎保育所や幼稚園も登園シールを園で貼っているからカレンダーは分かる。1年間のカレンダーのサンプルを前に貼り、好きな月を作った◎25日の次にまた24日があったり、同じ日が2つあったり、45日まであるカレンダーもあったが、それでいい。直せばいいだけ。

◎楽しい時間と空間を共有しながら数を学んでいる。準備の要らない算数の授業を幼稚園の遊戯室でやっているだけ。

◎くら雲の本番を幼稚園の遊戯室で

(2 ページから続く)

やった。幼稚園の子がお客さんになってくれるので、小学生がはりきる。これもそのまま行ってやるだけのこと。保育所・幼稚園から小学校に来てもらってもいい。「縄跳びするの、したい子おいで。」というように。

◎5歳児と1年生とでペアをつくり、1年間そのペアで通す。回を重ねることに関係性が変わっていく。

ペアでザリガニつりをした時に、相手がお転婆な5歳児であった1年生の男の子が「ペアを変えてほしい。」と言ってきたが、変えなかった。

その大変さが、その子を育てる。彼の成長の糧になる。

このペアも秋のカレンダー作りの際には仲良くなっている。「仲良くなれ！」でも「仲良くしなさい！」でもない。仲良くなれる場をいかにつくるかである。

◎連携活動で何をやるかは、あまり重要ではない。大事なのは一緒にやって何を学んでいるか。その可視化が次につながる。やりっぱなしはよくない。

◎活動に必要なペットボトルを集めた時、数えろと言わなくても、子どもたちは数えだす。もつと作りたい、明日もやりたいとなる。ペットボトルが足りなかつたら、子どもたちが自分たちで考えて、保護者会でペットボトルが必要だと協力と呼びかけるプレゼンをした。

◎中学生が保育所へ行く保育実習も行っている。活動の場を見ると中学生の人間性が分かる。園の子どもたちは、安心できる中学生の所へ集まる。もちろん最初集まらなかった中学生も何度も通い、園児と仲良くなる場を設けることで仲良くなる。

交流後の中学生の感想文より…「劇の練習で色を塗る時はおとなしかった園児達が、配役決めの日にはうまく決まらなかったり、セリフの練習も言う通りに動いてくれなかったりと苦労したが、そのことがとても良い勉強になった。」

◎お茶の水女子大学では、附属の幼稚園・小学校・中学校で幼小中連携を実践している。

<遊びを見つめる>

シャボン玉遊び 2枚の写真から見える違い

①うちわの骨組みを液に付けシャボン玉遊びをしている。

②赤茶色になったシャボン玉の液を持っている。

①は、おそらく先生が用意したであろう道具を用いた遊び。②は、子どもが自ら液に赤土を入れて工夫している。

◎昨年7月に岡田保育園と小学校の連携活動が保育園で行われた。シャボン玉で遊んでいたが、保育園の女の子がシャボン玉に園庭の赤土を混ぜていた。なぜそうしたのか聞いてみると「強くなりたいから」とのことであった。

◎実際に強くなるかどうかではなく、自ら工夫していること、そこが素晴らしい。

◎8月に保幼小連携研修で再度保育園に行くと、今度は、シャボン玉の液を子どもが自分たちで作っていた。液を作るには800ccの水があるが、600ccしか量れないピーカーが置いてある。どうするかと見ていたら、ピーカー1杯の600ccの水を入れて、そこに200ccを足していた。

◎保育を変えることは難しいことだが、保育園で朝に自由な遊びの時間を導入したところ、保護者から「最近何か変えました？」と聞かれたという。その保護者からは「子どもが朝、楽しそうに出かけていくから。」と言われたとのこと。設定で決まっていた遊びから、自分で選べる遊びに変わったことで、朝の遊びが楽しみになり、意欲的に登園するようになったもの。

◎(シャボン玉の保育士の記録より)記録は、事実をありのまま書くことが大切。「楽しそうに」とか「いきいき」とは書いていない。どんな表情をしていたか、どんなつぶやきがあったか、を書く。

◎エピソード記録とその考察により、遊びと学びがにつながる。このシャボン玉の話でいうと、2つの違ったものを混ぜるということ。幼児期の遊びの中の学びが分かって、初めて小学校以降の学びにつながる。

<遊びを育てる>

色水遊び 2枚の写真から見える違い

①先生が机の上に色が出る紙等たくさんの材料を全部揃えて置き、色水遊びをしている。

②子どもたちが園庭で積んできた花など道具や材料を自分で用意して色水遊びをしている。

◎鳴門教育大学附属幼稚園では、何も置いてないテーブルがあり、道具や材料は子どもが自分で取ってきて遊びをつくる。ある園では誰一人園庭に咲いている花を取りに行かなかつた。①では先生が作った環境では遊んでいるが、園の環境には働きかけていない。

子が環境に働きかけるようにする。春先や慣れない頃は、先生が用意することもあるが、段々引いていく。小学校や中学校もそうであってほしい。自分で学びをつくる＝アクティブ・ラーニング。

◎乳幼児教育の充実が大事。充実したものと充実したものが合わさることが大事。連携も大事だが、その前のそれぞれの質が大事。

～質疑より～

Q. 先日、朝来幼稚園の活動を見に行つた。非認知能力の育ちが見られた。シャボン玉遊びをしていたが、シャボン玉の膜の中に物が通ると思った子がいて、いろいろ試していた。細い棒は通つたが、尖つたものは通らないなど気付いて、遊び込んでいた。後でみんなに表現する場面もあって、他の子も納得していた。

次に中学校に行つたら、4人で協働学習をしていた。考えをまとめ、発表し、共有していた。

力をつけていく過程が同じであると感じた。問題の小学校はどうか、遊び込むから学び込む土土作りが、小学校の役割である。小学校・中学校が保育所・幼稚園を見に行くことが必要である。その素晴らしさ、大切にしているものなどを見取るための視点について教えてほしい。

A.最初は見えにくいので、保育所・幼稚園の先生に解説してもらいながら見ると良い。捉え方は人によって違うので、小学校の先生が、保育を見ながら記録・メモを取り、それを参考にお互いで話し合うと見えてくる。

ポイントとしては、自己発揮しているか。子どもが遊ばされるではなく、遊んでいるか。周りの環

境と一体的に見て、遊ばされているようなら議論する。小学校の先生は小学校の見方なので、意見を言う。それを保育所・幼稚園側が学ぶことも大事。率直に話し合うことが大事。その繰り返しで、同じ視点になってくる。

そのためにも一回でも多く無理なく足を運ぶこと。自分は、音楽は専科の先生がいたので、そういった空き時間を利用して幼稚園を見に行っていた。日常的に足を運び、子どもや先生から学ぶことが大事。

豊かな学びをしているんだと思って見ると、そうでないのでは違う。よく見ること、足しげく通うことが大事。

Q.全市上げて子どもを主体とした保育に取り組んでいる。アクティブ・ラーニングという言葉も出ているが、主体性を求めるほど、小学校でちゃんと話が聞けるのかというような声が保護者や小学校の先生から出る。保育現場では分かっているが、他者にどう伝えればよいか。

A.子どもが夢中になっているところを写真に撮って、言語化して保護者に伝える、プリントして小学校に渡すなど、可視化することが大事。遊び込んでいること、無茶苦茶やっていることは違う。心配なのは、無茶苦茶やっている方。遊び込んでいる中には、必ずルールが発生しているので心配ない。この遊びでこんな学びが生まれているということを伝える。保育記録も小学校に送るとよい。自分は、CD-ROMに焼いてもらい、担任しているこの子は、0歳の時、こうしていたのか…と思って見ていた。

遊び込んでいる状態は素敵なことなので、自信を持って発信してほしい。保護者会の時に映像を見せて伝えると良い。自分は毎週1回15分程やっていた。厳しかったが見ておかないと伝えられないので、見る目が育つ。伝えて初めて分かってもらえることもある。

Q.生活科の可視化については、担任1人では難しいが、やっていかないと次に繋がらず、可視化することが接続につながると思った。接続を考えた時にどういう視点で見ればよいか。

A.接続カリキュラムを作るときに、園のらしさ、「うちは言葉を育てる。」なら言葉で小学校とつながるなど、接続の焦点を絞るとよい。つながらないものはないが、全体を作るのは大変なので、視点を絞って見ていくことがポイント。

Q.学びに向かう力は幼児期に育まれている。スタートカリキュラムが適応指導になっているという指摘に共感した。生活科を切り口として、遊びの中の学びから自覚的学びにつなげたいと思っているが、ともすれば設定して成果物を求める形になってしまう危惧がある。生活科の意義をもう一度教えてほしい。

A.生活科は「探究」があるかどうか。夢中になって探究しているかどうか。生活科自体がスタートカリキュラムである。生活科の原点に戻ることが大事で、刺激を与えてくれるのが乳幼児教育である。自分は、子どもの素敵だなど思うところを記録し、文と写真に残していた。蓄積が大事。生活科は教科なのでテストで測ることも仕方ないが、活動の中の子どものつぶやきなどを把握することが必要。

講義「子どもの主体性が発揮される活動づくりのポイント」

◎連携と接続の違い

子ども同士・先生同士の交流…連携
教育課程をつなげる…接続

◎熱心な人がいて連携が進んでいるというだけでは、人事異動等により人が変わると連携が消えてしまう。教育課程に位置づけ、人が変わっても継続されるようにすることが必要。

◎連携から接続へ、両方とも大事。実践(連携)がないと接続(理論)にならない。

◎幼児期の遊び込みを学び込みにつなげよう。

◎連携活動で、並んで挨拶することがあるが、5歳児だけだったり1年生だけだったりの活動ならそんなセレモニーはしない。1年生が作った

名刺を5歳児に渡しているところもあったが、その時間を一緒に遊ぶ方が仲良くなる。子ども同士が会って名刺交換なんて普通(日常)ではしない。子ども同士は遊んで仲良くなる。

◎互恵性…同じ活動をしていても、5歳児と1年生のねらいは違う。それぞれのねらいを達成すること。

◎何が育ったかを写真やビデオ、記録などでとっておくとよい。今年はこんなことをしたと来年の先生に渡せる。

◎ミニミニ運動会という連携活動があった。園や学校の運動会が終わった時期に開催していたが、元々やっている運動会のリレー等の時に

一緒にやればよい。教育課程の中で無理なく一緒にやればよい。

◎小学生が用意して幼児に遊んでもらうような活動もあった。その時間、小学生は図工の時間なのに、製作ではなくお世話をしている。それなら迷路と一緒に作った方が楽しい。一緒に作れば5歳児らしい発想も出てくる。お世話はいらない。幼児に教えてあげようという発想でなくてよい。

◎校区の周囲の環境が活かせる活動が良い。小川、神社、田…地域・園・校の特徴を活かす。

◎これなら両方楽しくやれる、先生方が早くこれをやりたい、と思える活動をしてほしい。卒にはまらず、はじけていい。

グループワーク 生活科「楽しい秋いっぱい」での交流活動づくり



～発表より～ 活動案の例

<①構成：保育園、幼稚園、小学校>

「さつまいもパーティー」10月下旬、学校

◎1組が幼稚園と、2組が保育園と活動

◎1学期に芋植え。年間計画を立て、夏休みに協議を実施。

◎つながり活動のねらい：対象物と関わる、人の関わり。本時のねらい：小学校…数理的な処理、調理活動、におい、感触。知恵を出し合い分け方を考える。年長…色・形・におい・焼いた時の変化に気づく、一緒にめあてを達成する。

◎学校で1年生がさつまいもを洗っているところへ園児が入る。校長先生も参加し、子どもたちが芋に興味をわくような話をする。

◎さつまいもを切って焼く。量やどう切るかは子どもが考えて行う。ホットプレートで焼いてバターをのせ、その変化をみる。

◎材料を用意するが、子どもが自分たちで考えて話し合い、生活経験の中で試行錯誤しながら進めるよう、おおまかに置いておき、自分たちで持ってくるようにする。

<②保育園、小学校>

「あきのおとみつけた！」11月、学校

◎互恵性が大事だと学んだので、先生達が用意した材料で子どもが楽器を作るのではもったいないと思った。

→一緒に学校近くの神社に秋見つけに行く。小学校から草花の紹介をしたいので、小学生はグラウンドで見つけたものを図鑑等で調べたりして秋見つけに臨みたい。

◎1回目(夏の水遊び)のペアで行動する。1回目緊張していたが、秋の活動を楽しみにしている。

<③保育園、幼稚園、小学校>

「秋のものであつと驚くピタゴラスイッチ!!」

◎秋の散歩で一緒に秋見つけに行く。小学校近くの山へ図鑑を持っていき、グループで探して調べる。たくさん秋のもので遊んだ後、園と小学校がどうしていきたいか考える。

◎動くものに子どもの興味が大きいので、意図的に本などを置いて仕掛けていきたい。何を作るか、転がるためにはどうしたらいいかなど、あえて少し難しいものに挑戦する。完成を求めるのではなく、やってみる。後日につなげてよい。あつと驚くところってどこかを子どもから報告、先生達は子どもたちがこんなことに気づいていたという報告をする。

◎保育士と教師とで思いが違ふところもあるが、話し合いをするうちに、それいいですねとなっていき、いい活動案につながるの、良い機会であった。

<④保育園2、幼稚園2、小学校>

「あきのなかよしマーケットをひらこう」10-11月、小学校、クラスごとに各園と連携
◎校区が広いので、各園のなじみの深いところでコースに分かれ秋見つけを行う。

◎子ども同士でどんなお店をしたいかを話し、何が必要かも考えてから出かける。

◎それぞれでお店の準備をしておき、秋のマーケットは小学校の体育館で全員で行う。同じ種類の店でも、使っているものや作り方が違うので、配置などに配慮してコースの違いにも気づけるようにしたい。

◎あのお店に行きたかったという気持ちから、自分たちで他のお店のものをその後作ってみたりすることにつながるよ。

◎全体会の進行は、小学校教諭がするが、振り返りの場面は、幼稚園や保育所の先生も出て、両方から気づきを発表してまとめたい。

◎実態や大切にしていることを知れたうえで計画にあたることができ、次につながる遊びを考えられたことは良かった。

<⑤幼稚園2、小学校>

◎クラスごとに各園と

◎2学期に秋見つけを一緒にして、おもちゃを作るなど遊んで、まとめをする

◎ペアのクラスと園ごとに違う場所で行うことにより、まとめの時に違いを比較したい。

◎秋見つけでは、観点をしばって行うようネイチャーゲームビンゴを実施。ちくちくするもの、ふわふわするもの、においのするものといった項目が書かれたカードを持って、秋見つけをする。どんなものを見つけたらいいかが分かる。ちくちくするものでも、自分はこういうものを見つけたが、この子はこういうものをなど、違いがあつてよい。見つけた項目にシールを貼ることで達成感も得ら

れる。見つけたものでその後の遊びにつながるよ。

◎幼稚園の普段の活動の流れを聞くと、楽しいという気持ちを分断せずに続けていく、小学校はチャイムで途切れる、と大きく違う部分を感じた。幼稚園の方が十分に楽しんでいると思った。小学校でその気持ちをどうやってつなげるか話し合った。



～講評：木下先生より～

◎先生方がこうやって長時間話し合ったこと、二つの活動案を一緒に考えたことが宝。ぜひ続けてほしい。時間を上手に見つけて、放課後ちょっと集まって考えると連携は進む。

◎カリキュラムマネジメントが必要。PDCA、今日P(Plan)をした。次はD(Do)、そしてCAのチェックをして改善することが大事。

◎実践をやつて課題が見つかることが素晴らしい。見直しをもう一回やれば、いいことができる。失敗してもいい。遊びを忘れてはいけない。保幼と小学校とで時間の感覚が違うという意見があつたが、チャイムが鳴つても子どもたちがやりたいとなつたら、それは連携ができてきているということ

◎話し合いだけをするというのは、5歳児と1年生とでは難しい。作りながら相談の方が発達にはふさわしい。

◎舞鶴市といえば赤れんが。もみじやかえで秋の表現ができないか。どんぐりをつぶして焼いてピザにしたらどうか？おいしくないのでも小麦粉も混ぜて。子どもたちが「あ～やってみたい！」と思うことが大事。今日は教科書を見て活動案を作つたが、発想が大事。

◎今回は中舞鶴の実践公開。中舞鶴らしいものを見つけてほしい。苦勞すると仲良くなる。秋の活動が楽しみである。

<保幼小連携 公開授業・保育研修>

平成28年11月15日(火)

中保育所、中舞鶴幼稚園、中舞鶴小学校